オーストラリアキチヌの種苗生産

勝俣亜生・仲村伸次

1994年12月19日に海面小割生簀で飼育中の親魚15尾（1.2～2.5kg）を陸上30t親魚水槽に移した。産卵がみられないので、1995年2月13日に1994年12月に購入した天然魚5尾と合わせて20尾を、全部にゴナトロピン200単位／kgの筋肉注射を行ったうえで追加した。。2～5日後に少量の産卵はあったが、種苗生産に使用するだけの量にはならなかった。そこでさらに、海面生簀で飼育していた20尾（1.2～2.1kg、♂4尾）と天然魚2尾（1.2、1.6kg）を追加した。その際、雌雄不明魚にはゴナトロピン200単位／kgの注射をした。5日後の2月25日からの3日間で計660gの産卵があったが、すべて未受精であった。　その後、3月10日には水産試験場で飼育していた14尾（3才、650～950g、♂11尾）を追加したが、2～4日後に少量の産卵がみられたに留まり、結局今年度も種苗生産を行えなかった。

今年用いた55尾のうち♂の15尾は軽く腹を押すと精子が出る状態で、充分成熟していたと思う。となると雌の未成熟が原因と思われ、大きさは充分なので飼育方法に問題があったと考える。第一に考えられることが太り過ぎであるので、次年度に陸上に収容するまでは極力投餌をひかえ、体型の改善に努めたい。陸上に移してからのビタミンなど飼料添加物の投与も不充分であったと思う。